

海という名の本屋が消えた（82）

平野義昌

宇野千代「神戸元町風景」(その2)

宇野千代は、三越を「海鷗の羽裏のように灰白色」、大丸を「東郷青児の描いた少女のようにうす紅色」と表現する。元町におけるアメリカニズムの象徴と見た。補註1
〈……ただ、これらの大ビルディングのために、元町通りが嘗つて保っていたもの静かで優美なイギリス風の均衡を破壊されたであろうことは容易に考えられるのだ。〉註1

千代は元町の古い建築物の代表として「風月堂(原文ママ)」と「丹波屋雜貨店」を挙げている。補註2
〈……この二つの建物は、アメリカの色彩をともに加えた付近の商店と対比して、著しく目立っている。それは恰も、旧式のボンネット(引用者註、帽子)を戴いて、長いスカートをたくし上げた女の姿を連想させる。彼女たちは恐らく、古いコルセットをはめたまま、ついに老い朽ちるであろう。いや、あの短かった私の滞在中に於いてさえも、すでに×××は、ところどころ錆のついた鉄の扉(ドア)をじっと閉じたままであった。〉註1

伏字部分は不明だが店名と想像する。
〈若いアメリカ風俗の踊子たちが嬉嬉として肩を列べ乍ら町の真中を闊歩して行く。これに反して、年老いた英国風のラシヤメン(引用者註、外国人の現地妻)が疲れた足どりで軒下の水溜りを避け乍ら歩いて行く。そうなのだ。元町は古いイギリスから新しいアメリカへ傾きつつある。〉註1

〈元町の軒並には、外人相手のキュリオシティ(土産物を売る店)鼈甲細工屋、絵葉書屋、毛皮商、貴金属商までが、青い眼のように光っている。けれども、濃厚な異国情緒は、むしろ海岸通りやトア・ロオドの付近が本場らしいのである。元町は神戸の集中的な消費地点である。そして元町を華やかに彩るものが紅毛人であるにしても、元町を養っているものは、やはり日本人である。〉註1

元町商店街は周囲を、港、居留地、ビジネス街、官公庁、住宅街、花街と、地の利に恵まれた。外国人観光客・船員向けのみやげ物はじめ舶来品、高級品を扱う店が並ぶ。従業員は英語堪能である。日本人の買い物客も富裕層だ。散歩＝元ブラを楽しむのも彼らであり、モガ・モボの若者たちだ。庶民が買い物に来るのは年に1度の大売出し、11月半ばから始まる誓文払い期間だけだった。

千代の取材では、長い間元町は買い物をするだけの場所であり、「近代的なプロムナードとしての設備を整え始めた」のは「ほんの数年来のことだそうな」。即ち喫茶店出現である。「商店街(しょうてんまち)から散歩街(さんぽまち)」という市民的現象」は大阪の心斎橋も同じ、と言う。どこから得た情報か、「数年前から市の禁令が解けて、市民達は散歩の自由を得ることが出来たらしい」と書く。この「禁令」については不明だ。思い当たるのは、大正末から昭和初めにかけて不況の結果起きた混乱――米騒動、労働争議、金融恐慌――による集団行動規制だろうか。道徳習慣として年配の人間から見れば、夫婦・男女が肩を並べて歩くことは「中々メッソウもない」(註2)ことだった。

千代は「近代的なプロムナードの設備」である喫茶店を見て歩く。本稿「喫茶店文化」で触れた店が多い。6丁目「鹿の首の彫刻を看板に据えた三星堂」。ソーダ・ファウンテン(ソーダ水などを提供する装置)が大きな薬局の2階全部と1階の一部を占める「最も市民

的な喫茶店」。昼は近くの会社員や新聞記者、夜は夫婦や子ども連れが多く、たまに不良学生。銀座の「不二家」「三共」に雰囲気似ているらしい。

5丁目フルーツ・パーラー「元ブラ」は、藤椅子やテーブルに費用をかけているが、「何となく垢ぬけがしていない」。神戸商業大学(神戸大学の前身)と関西学院の学生をよく見かける。銀座なら「千疋屋」の感じ。

3丁目「エスペロ」。主人は「国際的なエスペランティスト」で、「外人や商館の番頭めいたのがよく遣つて来る」。

同じく3丁目「キピン・ファーマシー」は薬局の2階。「天井が低くって何となく鬱というい」。

その真向かいに新しくできた「本庄」。
〈本庄はもと写真屋で有名だったのだそうだけれど、改築して階下の一部を喫茶店、二階を食堂にあてて了った。階下はタイル張り、例の白い人造大理石のテーブルに木の腰掛、全くアメリカ式の感じである。食堂では神戸で一番大きな、(ああ、なんて大きな、)ピフテキを喰べさせるけれども、お昼のランチも安いし、スープも仲うちまい。高級社員や外人の夫婦連れがよく食事をとりに遣つて来ている。〉註1

アメリカ式のソーダ・ファウンテンやインテリアに人が集まる。

1丁目に古くからのバー「インタナショナル・バー」があった。補註3
〈……この親爺さんは、酒樽のような体をいつも青いシャツで包んでいる。ビール焼けのした緒い顔が、パイプをくわえて、汽船のように煙を吐いている。〉註1

表通りに女性接待する酒場・カフェはなかった。千代は、元町の面白さは「スカートの影に隠されている」と直感。「暗い裏露路」に足を踏み入れる。ここの酒場の客は外国人船員である。各店にはアメリカ船会社「ダラー・ライン」(客船、貨物船、郵便船)の入港日程が記されている。イギリス、ドイツ、ロシアの船も入港するが、アメリカの人氣が「圧倒的」である。客引きの男たちが当局の監視をくぐって、波止場や船で宣伝活動を行う。

高級船員は人力車を飛ばす。下級船員(中国人、フィリピン人、インド人)は徒歩で「元町を占領してう」。
〈……赤い布(きれ)を頭にぐるぐる巻いて跳足(はだし)で町を歩いている印度人の群は、元町の風景をそのまま一副の更紗模様にしてう。〉註1

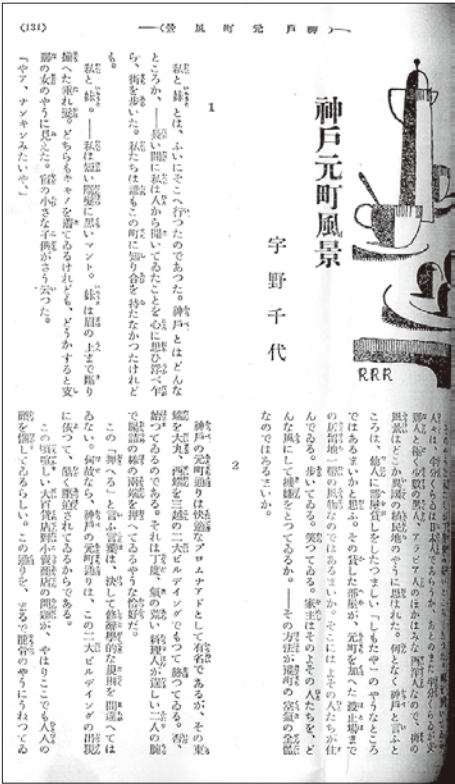
夜の街での各国人評価は的を射ていると思われる。〈……イギリス人のように皮肉でなく、ドイツ人のように吝嗇でなく、フランス人のように薄情でなく、日本人のように狡猾でないアメリカ人は、世界中の人氣者である。ドルのアメリカ人は第一に金離れが好い。元町の酒場の女たちの紅毛崇拜は、その九十パーセントまでがアメリカ崇拜である。〉註1

華やかな商店街の裏側「スカートの暗い影」に存在する酒場と女性。それは「都会の悪徳と腐敗と墮落と不潔との要素」であり、「近代の国際都市の欠くべからざる物理的装置」なのだ。補註4
〈元町の露路、三の宮駅裏(引用者註、旧三ノ宮駅)、トア・ロードから山の手、加納町にかけて、皮膚病のように拡がっている夥しい酒場は、大体、外国人相手のそれと日本人相手のそれと色分けすることが出来る。〉註1

以上が千代の見た「元町風景」である。

今回は千代の小説に登場する神戸を紹介して、新章に入る。

写真・註1 宇野千代「神戸元町風景」(「改造」1930年4月号)原文は旧字旧かな
註2 『志ぶき 神戸新名所の巻』川西健一編輯・発行、1927年補註1 「三越」 1924(大正13)年、6丁目に地元の井上油店が「元町デパートメントストア」を開業。元町に事務所を開設していた三越呉服店が買収、26(大正15)年大阪支店神戸分店を開店。28(昭和3)年神戸支店。「大丸」 1819(文政2)年京都の「呉服商下村」(屋号大丸)が兵庫津に出店。1908(明治41)年元町通4丁目に「大丸呉服店神戸出張所」開設。1927(昭和2)年三宮神社南側に8階建てのビル建設。建物写真は「ジャパンアーカイブズ」でご覧いただける。https://jaa2100.org/entry/detail/033537.html https://jaa2100.org/entry/detail/039768.html 〈……元町一丁目から六丁目迄両側に電気のトンネルをこさえました。三越や大丸の開店となったもんやサカイ。元町の商人さん大部困って桜を植えて見たり、ボンボリをつけて見たりしました揚句、京都の寺町を真似て電気をつけ、永久的のものとしたんやそうダス。〉前掲『志ぶき』
〈流行のはしりを見たいと思うならば、決して大丸や三越へ這入ってはいけない。元町の両端を占めているこの二つのデパートは、アララムシのように次第に元町の特色ある個人商店を枯らしつつあるが、ごく平凡な流行しな、諸君の前に展開しないであろう。〉(浅見淵「神戸」(1932年の原稿、『日本随筆紀行19 神戸・兵庫 ふり向けば港の灯り』作品社1987年所収)。
浅見は、尖端的な流行観察には元町からトア・ロードを歩き、ダンスホールや外国人経営の喫茶店に出かけるべし、と勧める。補註2 「丹波謙蔵商店」は5丁目にあった洋品雜貨店。明治初めに薬店創業し、1883(明治16)年頃洋品雜貨輸入販売に転身。店舗は「ジャパンアーカイブズ」を。https://jaa2100.org/entry/detail/054270.html 「神戸風月堂」の建物は同社サイトを7。http://www.kobefugetsudo.co.jp/ayumi.html
補註3 「インターナショナル・バー」 元町商店街の資料で見当たらないが、『神戸市商工名鑑 昭和5年』(神戸市役所商工課)に「インタナショナルバー 戸井とも 元町通一丁目二一〇」とある。
補註4 昭和初期の作家・酒井潔が大都市の歓楽街を探訪し、神戸事情もルポしている。客引きはブロークンな複数外国語を操り、接待する女性たちも国際色豊かだった。〈神戸の生命は、あのエキゾチックな朗らかさである。(中略)／ミス・ヨコハマの色彩があくまでアメリカ式であるのに反して、近代都市としての神戸の色彩は、インターナショナルリズムカクテルだ。(後略)〉(酒井潔「日本歓楽郷案内」 中公文庫、2014年)



宇野千代「神戸元町風景」(「改造」1930年4月号)原文は旧字旧かな

乙仲通 界隈の魅力と可能性

乙仲さんぽ活動報告 ②

地域の魅力と課題(リサーチ)

私たちが、有志の学生と地元の皆さんとの協働で取り組んできた「乙仲さんぽ」について、今回は初年、2015年度の活動概要を報告させていただきます。

2015年度は計5回の連続ワークショップを開催し、まちあるきで見つけたテーマに沿って、地域住民を交えたグループワークを重ねました。SNSによる情報発信も行い、地域内外の幅広いメンバーによって、将来にわたり継続して取り組んでいくことが出来るような仕組みづくりをめざしました。

初回のワークショップでは、まちづくりコーディネーターの根津昌彦氏(みなと元町タウン協議会コンサルタント)と、地元のまちづくりを牽引されてきた道上順一氏(乙仲通界限プロジェクト委員会事務局長)のお話を聞いて勉強したあと、午後から乙仲通MAPを片手に界限の魅力探しの散歩に出かけました。各自がスマホで撮影した写真をすぐに印刷し、ポスト



まちづくり会館での展示



グループワークの様子



2015 成果発表会

乙仲での活動を振り返って

神戸と言えば港町というイメージが強いと思いますが、六甲山の北側には田んぼと山に囲われた農村地域が広がっていて、生業と結びついた豊かな風景とコミュニティが存在しています。そこでは仕事や世代は違えど、明確に共有されている課題があります。私はそこで住み働く一員として、農村集落での地域づくりに日常的に関わっていて、多少なりともその成果に手応えを感じることが出来ています。

そんな私が、乙仲通という神戸の都心で、建築家の仲間たちとまちづくりの支援に取り組むことになったわけですが、農村集落における活動とはずいぶん勝手が違って苦しみました。

初年度は、複数のテーマに分類して界限の魅力と課題を分析したのですが、それらは大抵背中合わせの関係にあり、見方が違えば180°評価が変わりそうなことばかりだと分かりました。価値をどこに置か、どこでバランスをとるか、という視点が重要で、その軸が少し振

イットとつなぎ合わせて、まちあるきで感じたことが一目で分かるようなシールを作り、それを用いてディスカッションを行いました。

学生たちが界限のどこに魅力を感じ、どのようなことに問題意識を持ったのか、今後テーマを共有していく上で、分かりやすいデータをたくさん収集することが出来ました。そしてその成果を大きな地図に落とし込んで、こうべまちづくり会館のライブラリーカフェで展示し、多くの来館者に見ていただくことが出来ました。

2回目のワークショップでは、まちあるきで感じたことを話し合いながら、これから取り組んでいくテーマを5つに絞り込み、グループ分けを行いました。

3回目以降のワークショップは、取り組む手法やまとめ方も含め、グループごとでじっくり議論をしました。最初のまちあるきとは違って、それぞれがテーマをもって界限の至る所を再び歩き、写真にまとめたり、ヒアリングをしたり、図面を描いたり、とさまざまな手法を用いて、テーマに沿って界限の魅力と課題を分

析しました。

5回目のワークショップとして、各グループが取り組んだ成果のプレゼンテーションを行いました。この日に向けてさらに調査をしたり、計画案を考えたり、ミーティングをしたりするなど、学生たちが自主的に準備をすすめてきました。各グループの発表テーマは、以下のとおりです。

- 1)乙仲の魅力発掘・発信
- 2)共用空間のあり方
- 3)店舗へのアクセス・設え
- 4)街路の安全と快適性を考える
- 5)既存建物の利活用

発表を通じて、界限の魅力と課題、その状況を踏まえた今後の地域のあるべき方向性が見えてきたと思います。次号以降で各グループの取り組みについて、さらに詳しくご報告します。また、「乙仲さんぽ2015-2017 地域×学生×建築家3年間のあしあと」という冊子に写真や資料とともに詳細を記載していますので、併せてご一読いただければ幸いです。

ほどの効果をもたらすのか確信が持てず、それでも何らかの成果を提示しなければ、という葛藤がありました。

そんな迷いを抱えた者から、「デザイン提案をせよ」と差し向けられた学生たちはさぞかし苦労したことでしょう。彼らが悩みながら出したモデル提案が3年間の活動成果冊子のページの大半を占めていて、この活動はまさに学生たちの努力があってこそのものであったと改めて思います。これらの提案の図面や模型など、表層にあらわれたデザインだけでなく、そこに至った分析やコンセプトにこそ着目してほしいと思います。そこに見いだせる地域に潜在する価値と魅力を多くの方と共有し、守り育てていくことが出来ればうれしく思います。



村上 隆行 (むらかみ たかゆき)
eu建築設計 代表 / 一級建築士
／(一財)淡河宿本陣跡保存会代表
理事／神戸市農村定住促進コーディネーター／2015-2016年度乙仲通界限デザインワークショップ実行委員長